

「鬼がいた公園」

(作／白鳥 樹一郎)

登場人物

大輔 (小学五年生、いじめられっ子)

鬼六 (鬼、いじめられっ子)

静かな音楽に合わせて緞帳が開く。

秋の公園。上手よりに大きな紅葉の木。葉が赤く色づいている。

濃い夕焼け。太陽が沈もつとしている。

大輔が上手からとぼとぼと歩いて来て、舞台中央で立ち止まる。

大輔 ちえっ、何でぼくだけ仲間はずれなんだ。

大輔、ランドセルからリコーダーを取り出し、「ゆうやけこやけ」を吹きはじめる。下手から小さな泣き声が聞こえる。

鬼六 ぐすっ、ぐすっ。えーん、うわーん!

鬼六、下手よりで、体育座りで泣いている。鬼六は、青い体にしましまパンツ、二本の角。右側の角が折れている。

大輔 なんだ?

大輔、きよろきよろして鬼六に気付き、おそろおそろ近づく。

鬼六、顔を上げる。

大輔 えっ、もしかして、鬼?

大輔、後ずさる。鬼六、立ち上がる。

大輔 う、うわー! 鬼だ、鬼だ、鬼だー! どうかお願い、食べたりしないで。お願いです。命だけはお助けを。

大輔、舞台を走り回り、舞台中央にしゃがみ込む。鬼六、大輔に近づく。

鬼六 ごめん。びっくりした? そうだよな。俺、鬼だもんな。

大輔 あの、食べたりしない。

鬼六 食べたりしない。でも、お前、うまそうだよな。

大輔 (後ずさり) うわー、やっぱり食べるんだ。

鬼六 嘘だよ。食べないよ。

大輔 じゃあ、どついたりしない？

鬼六 ああ、しない。(手に持った袋からせんべいを出して)これ、食うか？

大輔 なに、これ？

鬼六 鬼せんべい。堅いけど、うまい。

鬼六、大輔の隣にしゃがみ込む。

大輔 (せんべいをかじり)うまい。

鬼六 俺、鬼六。お前は？

大輔 大輔。

鬼六 そっか、よろしくな。俺、鬼だけど。

大輔 ねえ、鬼六、さっき泣いてたよね。どうしたの？

鬼六 えっ、泣いてなんてないぜ。鬼が、泣くもんか。

大輔 涙、光ってるよ。「鬼の目にも涙」ってやつ？

鬼六 ばれたか。あんな、実は俺、いじめられてる。

大輔 えー、鬼なのに！

鬼六 鬼の世界にも、いじめはあるんだ。

大輔 へえー、鬼六もいじめられてんだ。ぼくも、ぼくも毎日いじめられてる。

鬼六 ふーん、どんなことされるんだ？

大輔 この間は、ズック、隠された。探すのに2時間、かかった。

鬼六 そっか、誰も手伝ってくんないのか？

大輔 はじめの頃は、みんな探してくれただ。でも、この頃はみんな知らんぶり。

鬼六 ほかには、どんなことされるんだ？

大輔 あとね、教科書に落書きされた。国語の教科書にタコの絵が描いてあった。

鬼六 もっとあるのか？

大輔 ぼくのクラスには、ボスがいてさ。そいつ、権太郎っていうんだけどさ、だれもそいつに逆らえないの。権太郎、時々、ぼくに体ぶつけてくる。そのたびに、ぼくは、吹っ飛んじゃうんだ。

鬼六 そっか、でもな、そんなのたいしたことじゃないぞ。鬼の世界はもっともっと厳しいんだ。

大輔 ど、どんなことされるの？

鬼六 鬼ごっこをする時も、缶蹴りの時も「だるまさんがころんだ」の時も、俺ばかり鬼にされる。

大輔 なんだ、かわいいじゃん。

鬼六 的当てゲームの的にもされる。玉が当たると両手をあげて、ウォーって叫ばなくちゃならない。

大輔 なんか、おもしろそう。

鬼六 飛んでくるのは、でっかい鉄の玉だけ。

大輔 ひえー、そんなのあり？

鬼六、立ち上がり、大輔の周りを歩き回る。

鬼六 こんなのは序の口だけ。俺たちの世界には「鬼奴三人組」ってのがいる。凶暴なやつらでさ、ボスの鬼平は、相撲が強くて張り手が強力、一の子分の鬼吉はハードパンチャー、二の子分の鬼助はキックボクシングの天才。何かあるたび、俺は

袋だたきだ。

大輔 鬼の世界にも、鬼みたいな奴はいるんだね。

鬼六 この間は、三人に追いかけてられて、俺は、針の山をはだして逃げ回った。足は血だらけ、痛いなんの。結局、捕まって、金棒で滅多打ちだ。右側の角が折れたのは、その時だ。

大輔 めちゃくちゃ、怖いよね。

鬼六 その前は、両手を引き抜かれた。三人組の一人が俺を羽交い締めにして、一人が右手、一人が左手を思いっきり引っ張ったんだ。スポンっていう小気味良い音がして、両手が抜けちゃった。

大輔 ひえー、おっかないよー。なんか、鬼の世界って、めちゃくちゃ怖いところなんだね。(大輔、鬼六の両手を引っ張る。)でも、鬼六。今、ちゃんと両手あるよね。

鬼六 一応、俺も鬼のはしくれだかな。復元能力があるんだ。腕、ひっこぬかれてもまたはえてくるんだ。でもな、完全に元にもどるには、一ヶ月はかかるんだ。

大輔 すげー。いじめられっ子でも、鬼は鬼なんだ。右の角は再生の途中なんだね。鬼六に比べたら、ぼくがされていることなんてたいしたことないみたい。ぼく、もつとがんばらなくちゃいけないのかなあ。

大輔、立ち上がり、鬼六の周りを歩き回る。

大輔 でもさ、体のことはまだ我慢できるよね。一番つらいのは、無視されること。権太郎が片目つぶると、みんな、知らんぷりだ。ぼくは、空気みたいになっちゃった。ぼくのクラスから、ぼくがいなくなっちゃった。

鬼六 そうか。大輔がみんなの目に見えなくなっちゃったのか。そりゃあ、叩かれたり、悪口を言われたりするより、ずっと、ずっとつらいことだよな。分かる、分かるぞ、大輔。ところで、そんな時、大輔はどうやって耐えてるんだ？

大輔 「おにた」と話してる。

鬼六 友達か？

大輔 ぼくの好きな本の主人公。ちっちゃな鬼だけど、優しくて勇気があるんだ。いつも「おにた」みたいになりたいって思うんだ。

鬼六 なればいいだろ。

大輔 ダメだよ。ぼくには、勇気がないもの。

鬼六 (大きな声で) そんな事じゃダメだ、大輔！それじゃあ、いつまで経っても、いじめられっ子のまんまだぞ。

大輔 そんなこと言ってもさ。

鬼六 なあ、大輔。ここががんばりどころだ。俺も頑張るからさ。

大輔 そうだよな、ぼくより鬼六の方がずっと大変な状況にあるんだものね。

鬼六 まあな、でも、二人して頑張ろうぜ。

大輔 でもさ、鬼の世界って本当にすごいよね。

鬼六 大輔、鬼の世界のいじめがどうしてこんなに凄まじいのか、分かるか？

大輔 どうして？

鬼六 それは、鬼が長い間、人間にいじめられてきたからだ。

大輔 ああ、そうだったんだ。

鬼六 「桃太郎」「一寸法師」「こぶとりじいさん」「おむすびころころ」それに「大江山の酒呑童子」どの話でも、鬼は悪者にされてる。鬼をいじめてるのは、人間だ。節分の時にも、「福は内、鬼は外」って思い切り豆をぶつけられる。

大輔 そっか。人間にいじめられた鬼達は、今度は身内をいじめるようになったんだね。いじめがいじめを産んだんだ。

鬼六 そうだ、いじめの連鎖が起きたんだ。

大輔 もしかして、権太郎もだれかにいじめられてる？

鬼六 そうかもな。

大輔 ぼくさ、自分より小さい子、いじめそうになったことがあった。そんな時、権太郎

に「幼稚園の子の黄色い帽子、盗ってこい。」って命令されたんだ。でも、ぼく、盗らなかつた。それからだ。権太郎のいじめが始まったのは。

鬼六 良かったじゃないか。いじめっ子にならなくて。

大輔 あのさ、ぼく、思ったんだけど「いじめの連鎖」はどこかで断ち切らなくちゃいけないんだよね。

鬼六 そんなこと、できるわけないだろ。

大輔 やらないよりやってみた方がましさ。いじめてる奴だって、きっと優しい気持ち、どっかに持ってると思うんだ。それを呼び起こす。

鬼六 どうやって？

大輔 まず、権太郎と決闘する。

鬼六 決闘？

大輔 言葉の決闘だよ。「いやなことはいやだ。」ってはっきり言う。そして、権太郎を幼稚園に連れて行く。

鬼六 幼稚園？

大輔 うん、ぼくと権太郎は同じ幼稚園なんだ。「白百合幼稚園」には、みんなが仲良しだった頃の思い出がいっぱい残ってる。「いつまでも友達」って書いた石碑も残ってる。優しいかった園長先生もいる。もしかすると、優しい心、思い出すかもしない。

鬼六 やらないよりはましか。俺もやってみるか。

大輔 鬼にも幼稚園ってあんの？

鬼六 ばかにしちゃいけないよ。俺が行ってたのは「鬼百合幼稚園」。鬼だって小さい頃はけっこうかわいいもんだぜ。

大輔 なんか、鬼六と話してたら、少し、元気が出てきた。せんべい、もう一枚くねる。ぼく、絶対、権太郎が優しくなるようにチャレンジしてみるよ。

鬼六 (せんべいを渡して)俺も、大輔と話してたら、一人ぼっちじゃないって思えてき

たぜ。もう、泣いたりしない。ようし、鬼の世界に帰って、ひさしぶりに「鬼百合幼稚園」に行ってみるか。

大輔 また会えるかな？

鬼六 節分の時かな？きつと、また会えるさ。

雷の音と稲妻。鬼六が消えている。

大輔 あれっ、鬼六がない。おーい、おにろくー。お・に・ろ・くー！

夕日が濃くなり、沈んでいく。照明が落ちる。(幕)